日本中世華厳学における成仏説の研究——高山寺系華厳学を中心に——

野呂靖

1、本論文の目次

課程博士の学位申請論文の要旨を述べるに先立ち、以下に目次を挙げる。

序論
第一章　研究の目的と先行研究の課題
第一節　日本中世華厳研究の目的
第二節　先行研究の概要とその課題
第一項　高山寺系華厳学に関する先行研究
第二項　中世華厳学に関する先行研究
第三節　本研究の視点
第二章研究の方法
第一節　時代区分と用語の規定
第二節　検討対象について
第三節　本論の構成
第三章中世華厳宗の系譜と文献
第一節　日本華厳の系譜資料
第二節　高山寺系華厳の系統
第一項　明恵の生涯と著作
第二項　明恵門下における諸師と著作
第三節　東大寺系華厳の系統
第一項　尊勝院系華厳の諸師と著作
第二項　戒壇院系華厳の諸師と著作
本論
第一章　中世東大寺系華厳学における成仏説
第一節　三生成仏説に関する異説とその展開
第一項　中国華厳学派における三生成仏説
第二項　凝然『五教章通路記』における三生成仏説解釈
第三項　戒壇院系華厳諸師における解釈の変遷
—「隔生」「非隔生」をめぐる諸師の見解—
第二節　浄土往生義と三生成仏説
第一項　尊玄撰『華厳孔目章抄』における浄土義解釈
第二項　中世後期における上生院系華厳諸師の浄土義解釈
—浄実『安養報化〈浄実私示〉』を中心に—
第二章　明恵における成仏説解釈
第一節　明恵思想の教理的枠組み
第一項『摧邪輪』における六宗判
第二項　五教判・同別二教判理解

第三項　明恵の顕密観
第二節　明恵の信満成仏説解釈
第一項　『華厳修禅観照入解脱門義』における信満成仏説
第二項　『華厳仏光三昧観秘宝蔵』における五秘密与五聖同体説
第三章　高山寺教学における成仏説解釈
第一節　『五教章類集記』における明恵・喜海の三生成仏説解釈
第一項　龍谷大学本による構成の再検討
第二項　『五教章類集記』巻三における見聞一生成仏説
第二節　明恵門下における『即身成仏義』解釈
―順性房高信撰『六大無碍義抄』二巻を中心に―
第一項　『六大無碍義抄』の書誌と成立背景
第二項　『六大無碍義抄』における高信の即身成仏説理解
第四章　中世真言教学における高山寺教学の受容
―頼瑜の即身成仏説に与えた『六大無碍義抄』の影響―
第一節　問題の所在
第二節　頼瑜と高山寺教学の接点
第三節　『即身成仏義顕得鈔』における『六大無碍義抄』の依用
第一項　『顕得鈔』における転用の用例
第二項　『顕得鈔』における『六大無礙義抄』批判
第四節　頼瑜における『六大無礙義抄』批判の背景
―真言教学における華厳・密教一致説に対する批判―
結論
翻刻資料篇
①浄実『安養報化〈浄実私示〉』一巻　翻刻
②順性房高信『六大無碍義抄』二巻　翻刻

2、本論文の目的

日本中世の華厳宗については、高山寺に住した明恵（一一七三―一二三二）や東大寺尊勝院の宗性（一二〇二―一二七八）、戒壇院の凝然（一二四〇―一三二一）など、高山寺・東大寺を代表する鎌倉初中期の諸師に関する個別的な研究が積み重ねられてきた。[1] しかし、著述の整理や各系統相互の影響関係など基礎的な問題をはじめ、教理思想の展開に関しては未だ全体を見通す詳細な解明には至っていない。

日本華厳における三生成仏説は、華厳宗における成仏に至る階梯が論じられていることから、密教教義における即身成仏説や、弥陀浄土への凡夫往生に関する問題ともきわめて密接な関連を有する議論の一つであり、多様な華厳宗の成仏説をめぐる議論の基軸となったと見ることが可能である。本研究は、これまで検討の対象とされてこなかった未翻刻資料や散逸文献の検出・翻刻を通して、明恵を中心とする高山寺系華厳において製作された華厳・密教教義に関する注釈文献と、東大寺系華厳諸師の論義資料との比較を行い、東大寺尊勝院・戒壇院・高山寺系の三系統における成仏説解釈の教理的展開を考察することで、高山寺系華厳学を中世華厳宗全体のなかに位置づけることを目的としている。

なお、本論巻末に、第一章および第三・四章において検討の対象とした、室町期の華厳宗僧である浄実『安養報化〈浄実私示〉』一巻、明恵門下の順性房高信による『六大無碍義抄』二巻の全文翻刻

を掲載した。

3、序論

序論では、明恵研究史、および日本華厳研究史を批判的に検討するとともに、中世華厳宗の教学的系譜と著述について整理を行った。

従来の中世華厳宗理解の枠組みにおいては、法蔵（六四三-七一二）・澄観（七三八-八三九）の教学を主に受容した凝然に代表される東大寺華厳学に、李通玄（六三五-七三五）の教学を取り入れた明恵を中心とする高山寺の華厳学を対置し、前者を「正統」「本流」と位置づけ、凝然の教学が後の華厳学を規定したとの評価を行う一方で、後者を「異端」「傍流」と理解する見方が定説となってきた。②序論では、従来の日本華厳研究においては、論義資料など未翻刻文献の多さから、具体的な教理思想上の比較がなされてこなかったことを指摘し、日本華厳において凝然の教学は必ずしも正系として継承されておらず、高山寺の華厳学についても異端として排除されていないなど、従来の枠組には、中世期の華厳宗諸師全体の教学的立場が反映されていない点で問題を有することを指摘した。

この点をふまえ、明恵および明恵門下の生涯と著述を整理し、高山寺華厳の特色である顕教・密教併修の立場は、海印寺の道雄（？-八〇〇）、仁和寺の景雅（一一〇三-一一八五）、東大寺の聖詮など平安期以来の日本華厳の思想的系譜に連なるものであることを指摘した。また、あわせて東大寺の尊勝院、戒壇院の諸師と著述についても整理を行った。

4、本論要旨

（1）中世東大寺系華厳学における成仏説

第一章では、東大寺戒壇院・尊勝院系の諸師における三生成仏説解釈の展開を考察した。三生成仏説とは、智儼（三〇二-六六八）撰『華厳孔目章』などに淵源を有し、法蔵によって組織化された見聞位・解行位・証入位の三生を経て成仏に至るとする華厳学独自の成仏説である。中世期の華厳宗においては、盛誉（一一七三-一三五一）が「初心始学之同法」のために抄出した『華厳手鏡』の論題の多くに三生成仏をめぐる議論が採用されるなど、中世期の華厳宗僧にとってきわめて重要な教義上の論題であったと考えられる。③

第一節では、三生の各生涯が事実上の三生を経る「隔生」であるか、同一の身体上に三生の区分が収まった「非隔生」であるかを巡る成仏に至る階梯の長短を問題とする議論を検討した。東大寺戒壇院の凝然は、『五教章通路記』において、両説を併記した後、解行位の満位における最後の段階（終心）にただちに証入位に入るため、仏果は「解行一生の内」に包摂され、解行身上に「死」は介在しないとする見解を採用し、事実上の二生成仏ともいえる解釈を提示した。④本論では、こうした解釈が法蔵の三生成仏説とは異なった『華厳経問答』など新羅系の文献を基盤としていること、凝然の解釈が審乗（一一五一-一二二五）、盛誉など凝然門下の学僧による『五教

章』注釈書に「南都古来の一義」として継承されていったことを明らかにした[15]。さらに、久米田寺の聖憲が、この立場を基盤として見聞位における一身上に三生を摂するとみる見解を提示するなど、三生という生涯の枠組み自体がきわめて短縮化され、中世期の華厳宗においても事実上の一生成仏を認めるという即疾成仏の傾向が強調されていったことを指摘した[16]。

一方、日本華厳においても三生隔生を実義とみる見解は、尊勝院の宗性に淵源を有し、凝然門下においても禅爾（一二五一-一三二五）・湛睿（一二七一-一三四五）に継承されていったことを指摘した[17]。なかでも近世の三生隔生をめぐる論義草ではこの隔生説が「相承の実義」である「本寺義」と規定されるに至り、凝然が主張する解行一生に得果を認める「非隔生」の立場は「末寺義」と認識されていった過程を明らかにした[18]。このように、中世期の東大寺華厳では、速疾成仏と次第成仏との二説が併存しながら議論が継承されており、凝然の見解が定説化されていないことを指摘した。

第二節では、三生成仏説が弥陀浄土への凡夫往生を可能にさせる論理基盤として依用されていたことを、従来検討されてこなかった鎌倉期の尊玄・聖詮・明恵、および室町期の浄実による浄土義の比較を通して論じた。中世期の華厳宗においても、平安期から興隆を迎えた浄土教への対応が図られており、華厳学との整合性が問題とされている。尊玄は『華厳孔目章抄』において、西方浄土を見聞位に相当する「無量雑類世界（須弥山界及樹形等界）」に配当し、娑婆世界と並んで限りなく低く位置づけることで、智儼など中国華厳諸師が西方浄土を三界外と規定する解釈の会通をはかり、三乗教における凡夫往生を否定しつつ、華厳一乗義の立場における「未断惑の凡夫往生」を認める立場を示していたことを指摘した。また、中世後期に生きた東大寺僧浄実による論義草（『安養報化〈浄実私示〉』）の分析を通して、明恵、弁玄など中世後期の華厳宗僧や、貞慶・良遍らによって主張された通化説が三乗義理解に適用されていったことを指摘し、日本華厳においても中世後期には三乗義・一乗義両方における凡夫往生が容認されるなど、三生成仏説を基盤としながら浄土義の構築が行われていったことを明らかにした。

(2) 明恵における成仏説解釈

第二章では、第三章における明恵とその門下における三生成仏説解釈を検討する前提として、明恵晩年の著作に相当する『入解脱門義』『華厳仏光三昧観秘宝蔵』を中心に、明恵の信満成仏説を中心に検討を行った。

明恵の思想は華厳学を中心としながらも、密教教理の導入を行った点に特色が認められるが、成仏説についてもそうした明恵独自の思想的立場のなかから構築されたと見ることができる。明恵は『入解脱門義』において、李通玄の三聖円融思想に基づいた信満成仏説を主張したが、これを実現する行法として、『華厳経』「入法界品」に由来する文殊・普賢・観音・弥勒・毘盧遮那の五聖と、不空訳

『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』一巻に基いた、真実菩提心なる金剛薩埵と衆生の妄体を象徴する欲・触・愛・慢の四金剛菩薩の五秘密尊とが同一の尊格であるとする「五秘密与五聖同体説」と称される新たな教理を構築した（『華厳仏光三昧観秘宝蔵』）。本章では、同体説の分析を行い、あわせて明恵の顕密教判を検討することで、明恵は、顕教の菩薩であっても「大日所成の諸尊」と解釈する密教教義に基づく顕密観に基づき、密教説によって顕教が包摂されていく点を重視していたこと、さらに華厳を密教義に引き入れることによってより密教義の「深旨」が明らかになるとする独自な理解を背景に顕密合行が行われていたことを指摘した。

（3）高山寺教学における成仏説解釈

第三章では、明恵によって形成された顕密の両面にわたる成仏説が、明恵の門弟によって、三生成仏説、即身成仏説の立場から詳細な解釈が付与され継承されていったことを、従来所在不明とされてきた明恵門下の学僧による著作を新たに検出・翻刻し、その教理的特色について検討を加えた。

第一節では、明恵随一の門弟である喜海の『華厳五教章』講説をとどめた順高編『五経章類集記』を取り上げた。本書には従来、東大寺図書館所蔵本が知られていたが、残欠箇所を補うことのできる龍谷大学所蔵本を検出し、従来考えられていた成立年代・調巻のあり方について訂正を行った。[9] また、『五教章類集記』では、一念の信を発する段階である見聞位を重視し、「堕地獄の衆生」においても信を得る可能性が論じられていくとともに、見聞位における成仏を密教における即身成仏と一致させる独自な立場が示されていることを明らかにした。さらに、『五教章類集記』における明恵・喜海による三生成仏説理解は、見聞の信智を発得した段階には「死」による三生各生涯の隔たりは存在せず、現在の身体（骨肉身）による見聞位の段階における一生成仏を認める立場にあることを指摘した。

また、こうした身体の連続性を認める見解を第一章で検討した東大寺系の華厳学諸師の見解と比較を行った。本書が凝然の『五教章通路記』より約三十年先だって成立している点から、凝然が提示した「非隔生」説の最も早い用例と考えること、聖憲が『五教章聴抄』撰述時に参照した文献には、『五教章類集記』が含まれていることから、高山寺系華厳の解釈が戒壇院系に流入していたと考えられることを指摘し、尊勝院系の宗性より始まる見解が実英によって「本寺義」として伝承される一方、凝然による戒壇院系祖師の見解、さらには凝然に先立つ『五教章類集記』における高山寺系華厳学の見解は、「末寺義」として継承されていった思想的な流れを明らかにした。

第二節では、従来散逸文献とされてきた順性房高信（一一九三―一二六四）による『即身成仏義』の注釈書『六大無碍義抄』二巻を新たに検出し、本書が即身成仏を論じながらも、明恵の聞書を数多く転用し、華厳教義との同異点について解釈が施された特異な注釈書

である点を明らかにした。『六大無碍義抄』は多くの点で『解脱門義聴集記』における明恵の口説を転用し、華厳と密教義との対応を行っているものの、成仏説については明恵と異なった立場を示している。明恵が、顕教中の密意を説く華厳一乗では「即身成仏」を論じていると解釈するに対し、高信は『異本即身義』に基づくことで、一乗教における成仏は、三密行と五相成身観がそなわっていないために、「理」としては即身成仏を説くものの、「智」すなわち行者の主体的な側面からの即身成仏は説かれていないとして認めていない。本節では、明恵門下においても、必ずしも見解が一致していない背景として、明恵の顕密一致の立場が同時代の真言教学には容認されない解釈として「最秘事」の扱いを受けていたことを指摘した。

（4）中世真言教学における高山寺教学の受容

第四章では、中世期の諸宗派における高山寺系の成仏説の受容と展開について、とくに新義真言教学の大成者として知られる中性院頼瑜（一二二六-一三〇四）による即身成仏義解釈との比較を通して考察を加えた。

頼瑜の初期の著作である『即身成仏義顕得鈔』は、従来、興教大師覚鑁（一〇九五-一一四三）による教学の影響下のもとに形成されたと考えられてきた[10][11]。しかし『六大無礙義抄』に説かれる明恵や高信の『即身成仏義』解釈が大幅に転用され、劣機の凡夫による即身成仏の可否をめぐる議論などこれまで「頼瑜説」と考えられてきた箇所においても本書と本文的に一致するなど、高山寺における成仏説が大きな影響を与えていたことを明らかにした。

また頼瑜は、華厳の四法界説と真言行者が三密行を成就するために要する三力（我功徳力・加持力・法界力）など密教義とを同一視する『六大無碍義抄』の理解については、削除・改変を加えており、明恵・明恵門下の義を高く評価しつつも顕密観に関しては批判的に受容されていた。すなわち、明恵における華厳と密教とを対応させる教学は、すでに明恵在世の段階から真言宗僧による批判の対象となっており、頼瑜においても、華厳教義と密教義は「円融の名言は同じであるが義は異なる」という顕密対弁の立場から受容されたものあったことを指摘した。さらに、頼瑜の『即身成仏義顕得鈔』には「私云」とされる箇所においても『六大無碍義抄』の本文と一致するなど本書の形成過程を再検討する必要のあることを示唆した。

（5）結論

以上の考察に基づき、高山寺の華厳学は、東大寺系の華厳学と共通したテーマを扱いながらも、密教教義の導入（即身成仏説）を行うことで、より独自な立場を構築し、真言密教の教義形成にも多大な影響を与えていたことを、高山寺・東大寺に遺された三生成仏説に関する議論を整理するなかで明らかにした。従来の日本華厳研究においては、中世期の華厳学は固定化した教学の相承が行われていたと考えられてきたが、成仏の遅速や浄土往生の問題など共通の問

題意識のもとに多様な異説が立てられるなかで形成されていったことを指摘した。

註

① 日本華厳に関する研究史については、北畠典生「日本における華厳研究の歴史と課題」（『仏教学研究』五〇、一九九四）参照。その他、中世華厳宗の諸師に対する個別的な研究としては、凝然の立祖説や、法相宗観・禅宗観など基礎的な検討を行った藤丸要氏の研究がある。また、高山寺における華厳学については、村上素道『栂尾山高山寺明恵上人』（一九二九）、石井教道「厳密の始祖高弁」（『大正大学学報』三、一九二八）、島地大等『日本仏教教学史』（一九三三）、坂本幸男「明恵上人の華厳思想」（『華厳教学の研究』、一九五六）などが先駆的な研究であり、近年では、明恵の密教的な実践理論を解明した『明恵上人思想の研究』（大蔵出版、二〇〇三）や明恵の教判説など基礎的な検討を行い明恵思想の統一的な解明を進めた前川健一氏の成果が注目される。

② 鎌田氏は、「日本華厳における正統と異端～鎌倉旧仏教における明恵と凝然～」（『思想』五九三、一九七三）、「中国華厳学よりみた法界義鏡の特質」（東洋文化研究所紀要五二、一九七〇）、および「南都教学の思想史的意義」（『日本思想体系『鎌倉旧仏教』、岩波書店、一九七一）において、凝然の教学が法蔵・澄観の二師の教学を継承する点に特色があり、こうした凝然教学が後代の東大寺系華厳学を規定したと指摘した。鎌田氏の凝然研究において重要な点は、凝然・明恵の教学を中国華厳の受容態度に基づいて「正統」「異端」に分類した点である。すなわち法蔵・澄観の教学を主に受容した凝然に代表される東大寺華厳学に、李通玄の教学を取り入れた明恵を中心とする高山寺の華厳学を対置し、前者を「正統」「本流」と位置づける一方で、後者を「異端」「傍流」と指摘したのである。この点については、近年藤丸要氏によって再検討が行われている（「鎌倉期における東大寺華厳」『鎌倉期の東大寺復興―重源上人とその周辺』所収、二〇〇七）。

③ 盛誉『華厳手鏡』（日仏全一二、四五三頁上）

④ 凝然における三生成仏説理解を窺うことのできる資料には、『通路記』『華厳孔目章発悟記』『華厳五十要問答加塵章』の三書が存在する。これに加えて凝然には、『三生成仏義』と題された一巻の著述があったことが知られているが現存しない。また『通路記』には、「三生成仏、義門広博、開レ門尽レ旨、不レ可二率周一。具如愚草五教賢聖第五十七八九三巻、立二十種門一、狩レ門明レ義」とあることから、『華厳五教章賢聖章』第五十七・八・九巻の三巻にわたってこの問題が取り上げられていたことが知られるが、本書は零本であり当該箇所は現存しない。

⑤ 審乗『華厳五教章問答抄』（大正七二、七〇九頁下）、盛誉『華厳手鏡』（日仏全一二、四五九頁上）

⑥ 聖憲『五教章聴抄』（日仏全一二、一二九頁下、五七四頁下）

⑦ 禅爾の見解については、『解行証果海隔生』（東大寺図書館、架蔵番号一二一／九四二／一）参照。その他、湛睿については『五教章見聞鈔』（大正七三、一五三頁下）参照。

⑧ 実英『五教章不審』（大正七三、二三八頁中・下）

⑨ 明恵門下および高山寺における教学展開については、納富常天「高山寺教学の展開―丹州神尾山寺を中心として―」（『金澤文庫資料の研究―稀覯資料篇―』一九九五）、同「解説―高信編『解脱門義聴集記』―」（『金沢文庫研究紀要』四）土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統―講説聞書と伝授聞書とをめぐって―」（『訓点語と訓点資料』九五、一九九五）参照。高信の密教理解については、拙稿「順性房高信と頼瑜―頼瑜教学に与えた高山寺系密教学の影響」（『印度学仏教学研究』五五・二、二〇〇七）、「明恵門下における『即身成仏義』解釈―高信撰『六大無碍義抄』上巻翻刻―」（『仏教学

研究』六二・六三、二〇〇七）参照。また、『五教章類集記』については、土井光祐「東大寺図書館蔵五教章類集記の資料的性格―義林房喜海の講説とその聞書類として―」（『築島裕博士古希記念国語学論集』汲古書院、一九九五）参照。

⑩　山野智恵「頼瑜主要著作解説」「第七即身成仏義顕得鈔三巻」『頼瑜―その生涯と思想―』所収、智山伝法院選書七、二〇〇一、一六八頁、大塚伸夫「頼瑜僧正の即身成仏思想について―『即身成仏義顕得鈔』を中心に―」（『新義真言教学の研究』、二〇〇二、七四―七五頁）。